The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	都市と身体
Author(s)	島先, 京一
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 158-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52757
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

都市と身体

島先京一／成安造形大学

今日の人びとにとっての生活とデザインを考えるに当たって，都市という生活環境の在り方は無視できない重要性をもつ。まず，都市とはどのような場所なのであろうか。

都市に対する定量的な定義は，あまり簡単ではない。総人口や人口密度といった，一見したところ，客観性が期待できそうなデータは，都市の実相を反映しないことも少なくない。

そこで，デザインという営為にとってひとつの方向付けとなるような要素として，都市を捉えることを提唱したい。デザインのイメージ決定において，「都会的である」という形容は，多くの場合，積極的な方向付けであると判断される。そのようなポジティヴなイメージをもたらす都市とは，どのような生活環境なのであろうか。

まず都市という空間を性格づけているのは，他の地域では達成が不可能な，多様かつ集中的な消費活動であろう。その消費活動には，単に物品の購入のみならず，様々な空間体験も含まれる。

多くの地方出身の若者を都市に惹きつける要素として，交通手段のマルチ・リンケージを挙げることができる。いわゆる地方都市や田舎においては，交通手段が線的な一次元性を示すのであるが，そのような中にあって若者は，複数の自己同一性を装うことが，困難である。マルチ・リンクされた交通手段をもつ都市空間にあっては，移動の解が複数存在するため，若者たちは複数の自己同一性を使い分けることができ，その結果，新たな自己の獲得が容易になる。

さらに都市においては，交通手段が平面的にマルチ・リンクされるのみならず，その三次元的な上下の拡張を伴いながら，様々な空間がハイパー・リンクされる。もちろんこの場合のハイパー・リンケージは，サイバースペースにおけるハイパー・リンケージのような，トポロジーを越えるような空間の連結ではない。しかし，地下空間や高層建築空間が縦横無尽に多重連結された都市において人びとは，空間から空間への移動において，途中の過程を敢えて認識する必要はないし，しようともしない。特に地下空間の移動の際にほとんどの人びとは，現在の自身の位置と地上の位置関係の対応関係について，気にかけない。そのような空間の連結とその体験においては，本質的な空間認識の変容が起こっていると考えられる。

一見すると，多様で集中的な消費活動の拡張が，量的な変質としての都市空間の三次元的なハイパー・リンケージを引き起こしたかのように見える。しかし，ジグムント・バウマン Zygmunt Bauman による，現代の消費社会が消費者の欲望の満足と不満足を継続的に刺激しながら，消費者に対して不断の質的な変化の提供を行わざるを得ないという指摘を考えると，都市の空間のハイパー・リンケージは，都市における消費生活の根本的な質の変化のために起こったことになる。空間のハイパー・リンケージの実現のためには，水平方向の空間拡張とは比較にならないほどのコスト投資の上昇スパイラルが起こるが，都市の中心部はそのようなコストも瞬く間に回収してしまい，更なる空間の変容が画策さ

れるのである。

消費活動のみならず，ビジネスの観点からも，先進的な大都市は，その空間構成において量的な変化のみならず，質的な変容を見せている。サスキア・サッセン Saskia Sassen は，ビジネスとデジタル情報ネットワークの結びつきに注目しながら，最先端のグローバルなビジネス・コア地域が，水平方向への拡張ではなく，中心部に向けていわば内的に拡張していくことを指摘している。また彼女によれば，そのようなグローバルなビジネス・コアは，世界中でも数えるほどしか存在しないという。

ハイパー・リンクされた都市空間の内部を移動する人にとって，自らが行動している空間の全体像を認識し把握することは，困難になることが予想される。そしてそのとき都市に暮らす人びとにとって，携帯型デジタル情報端末による空間の認識が，ひとつの可能性として立ち現れてくる。しかし自らの所属する空間認識をデジタル情報機器に委ねてしまったときに，私たちの生活感覚は深刻な脱構築の過程にさらされてしまうのではないか。

まず第一に，携帯型デジタル情報端末による空間認識は，私たちに大地と身体の関係に関する認識の放棄を要請する。都市とは本来，大地という自然を人工物によって覆うことによって生じた空間である以上，都市においては大地との関係が希薄になるのはある種の必然とも考えられるが，しかし完全に大地との認識連鎖を絶ってしまうことの向こう側には，死に直結する危険性が潜んではいまいか。

第二に，携帯型デジタル情報端末の活用は，複数のコミュニケーション空間への同時存在を可能にするのであるが，そのことがもたらす本質的な困難を私たちの身体を伴った自己認識は，管理しきれないのではないか。

第三に，携帯型デジタル情報端末の使いこなしに当たって私たちは，私たちの身体能力のごく限られた一部だけを活用している点にも，本質的な危険の一端があるように思われる。きわめて限定された視覚官能の活用を要請された身体は，効率性の追求という名の元に矮小化された身体であり，過剰な身体の矮小化がもたらす危険については，ポール・ヴィリリオ Paul Virilio も警鐘を鳴らしている。

そして第四に，携帯型デジタル情報端末は，その空間情報発信に当たって，マクダナルダイゼーションの危険をはらんではいまいかという恐れがある。効率性，計量可能性，予測可能性，非人間的な技術の活用がマクダナルダイゼーションの主要な次元であるが，携帯型デジタル情報端末による情報発信には，これらの四つの次元が全て当てはまる可能性があり，空間情報の発信もその例外ではない。携帯型デジタル情報端末を活用している個人は，実際には権利として活用しているのではなく，義務としてその使用を強制されている側面も否定できない。

このように都市においては，空間と身体に関する認識の脱構築が進行しつつあり，それは決して楽観的に放置してよいものではないのではないであろうか。